

【義父×義兄】狂愛3Pダブル調教。

口も乳首もクリもおまんこもメス化させられ、ダブル中出しまで完堕ちする話

サンプル（一部抜粋）

「ぐ…う、あ、んん…、…っ」

おまんこに突っ込まれたお兄ちゃんのモノ。

吸引パイプでクリが大きくぷっくりと腫れて、身体がびくんびくんと痙攣を続ける。

口にはお父さんの大きなモノ。

乳首はお父さんの指にぎゅむ♡ぎゅむ♡とこねられ、ピンピンに勃起している。

じゅぶっ♡ぐじゅ…♡

いろんな音が見慣れた自分の部屋に響いていて、異空間のように感じる。

唾液と涙と汗が混じって、もうめちゃくちやで口内を犯すお父さんのモノが苦しくて、何も考えられない。

なんでこんなことに…なったんだっけ…。

お母さんと二人で過ごすあの穏やかな日常があるだけで、私は良かったのに……。

こんな快感を、知りたくなんて無かった。

半年前

「菜摘、二十歳の誕生日おめでとう！」

お母さんが嬉しそうに私にプレゼントを渡してくれる。

「ありがとう……！」

目の前にはお母さんが手作りしてくれた誕生日ケーキ。

かわいい2と0のろうそくが刺さっていて、ゆらゆらと火が灯っている。

ふーっ……と息を吹き、今の幸せを胸に刻み込む。

……

お父さんは、私が小さい頃に浮気して出て行った。もう顔も覚えていないし、どんな人だったのかも覚えていない。

でも別にそれを不幸だなんて思ったことはない。

だってお母さんが沢山愛してくれて、女手一つで私を育ててくれたから。

「お母さんは、ママでありパパでもあるからね。」

なんて言ってたっけ……。

普段は私の為に毎日朝早くから夜遅くまで働いてくれて…2か月に1回くらいしか休みもなくて…。

「菜摘が進みたい道に進めるように…お母さんががんばってるからね！」
っていつも言ってくれてたな。

2か月に1回の休みは、私と一緒に過ごしてくれて…キャッチボールをしたり、お菓子作りをしたり…。

お父さんがいなくなつて、何も不満はなかった。

「それでね、菜摘。」

お母さんがそつと私の髪を撫で、優しい声で話し始める。

「ん？」

「菜摘も二十歳になつたし、お母さん…そろそろ結婚したいなと思って…。

その人も私と同じシングルで…。あ、子供はもう22歳らしいんだけどね！

…その人と結婚したいなつて…。お金持ちな人なの。借金とか菜摘の今後の事も考えて…。

あ、菜摘が嫌なら言つてね！菜摘の気持ちも大切だから。」

少し顔が赤くなつたお母さん…。

幸せそうに俯くお母さんを見ると、私まで幸せな気分になる。

今まで仕事ばかりで、恋愛もせずに全力で私を育ててくれたんだもんね。きっと私のために、いろんな事を我慢してきたんだろうな……。

お母さんには幸せになってほしい。笑っててほしい。

心の底からそう思った。

（中略）

顔合わせの日。

現れたのは整った顔で髪を茶色に染めた、見るからにモテるであろうお兄ちゃん…。

そして、がっちりとした体格、白髪まじりの髪で渋すぎる…いわゆるイケオジのお父さんだった。

思わず息を飲むような、圧倒的な存在感。

「君が菜摘ちゃん？」

俺、ずっと妹が欲しかったんだ…！」

お兄ちゃんが私の両手を握り、ぶんぶんと激しく握手してくる。

「え、あ…」

いきなり詰められる距離感にどぎまぎして、うまく反応できない。
私の両手を簡単に覆い隠せてしまう、細くて大きくて綺麗な手…。

それが妙に熱くて、戸惑ってしまふ。

「こら。やめてあげなさい。菜摘ちゃんが困ってるだろ。」

斜め前から響く、低くて重厚感のある声。

声に反応して顔を上げると、穏やかな表情をしたお父さんが視界に入った。

ほんの一瞬、目が合う瞬間にねっとりとした視線を感じたけれど…多分気のせいだ。

「ごめんね。菜摘ちゃん。」

にこっと微笑んだお父さんは、見た目は威圧感があるのに、良い人そうに見える。やっぱり…お母さんの見る目は間違ってたんだ…。

この人ならお母さんを幸せにしてくれそう。

お兄ちゃんはお父さんに静止されて、私の手を解放してくれて…ホッと胸を撫でおろした。

「い、いえ！」

これからよろしくお願いします！」

私はガバッと頭を下げ、笑顔で挨拶をしながら……幸せな未来を想像していた。

お父さんとお兄ちゃん…。

きっと仲良くなれるよね。

お母さんだって幸せに…なれるんだろ…うな。

私は確かにそう思っていた。

この時点でもう、目をつけられていたなんて知る由もなく。

(中略)

「これだけ濡れてたら…簡単に入っちゃうねえ。

時間がないし…一旦俺に初めてをちょうだい。

あとでゆっくりと愛してあげるから。」

「や…待って、だめ…っ」

必死で抵抗しようと手首を動かすのに、手錠の金属音だけが響き、私を解放はしてくれない。

「あ、そうだそうだ。」

これ、持ってきたんだった。」

お兄ちゃんベッドに置いたままだった小さな器具を手に取り、

「これでクリは気持ちよくしてあげるからね。」

とくすつと笑った。

「なに…それ……」

「ん？ 吸引パイプ。」

「っ…」

異様な形……。今までこんなオモチャを見たことも、使ったこともない……。

「嫌……お兄ちゃん、お願い……やめて……」

お願いだよ、ごめんね、避けたのは謝るから……許して……」

自分が今からどうされるのか、怖くて怖くて……泣きじゃくる。

お兄ちゃんは私の泣き顔を見て目を輝かせ、楽しそうに笑う。

狂ってる……。目の前の人間はお兄ちゃんなんかじゃなく……色欲にまみれた悪魔だ……。

「お願いだから……」

私の懇願は無視して、ベルトをカチャカチャと外していく。

「はあ……なっちゃんとやっとな良しになれる」

ギンギンに反り立ったモノが、ズボンの中から取り出され……私は泣きながら目を閉じて、首を横に振り続ける。

「だけでもう……私には逃げ道なんて一つも残されていなかった。

カチツと小さなスイツチ音。ヴーと小さく響く機械音。

「っ……は……たすけて……お母さん……お父さん……」

小さな悲鳴の直後、吸引パイプをクリに押し当てられた。

「んぐっ、あああ……」

クリを機械的に吸引され、中の部品がコリコリとクリをなぞる。

「あ、あ、あ……やだ……やだ……つ、あああ……つ」

刺激が続けば続く程、身体がぞわぞわして呼吸が浅くなっていく。

「あーあ。おまんこヒクヒクさせちゃって。

かーわいっ」

お兄ちゃんの愉悅に浸った声が耳に届いた瞬間、ズドンと一気に挿入される。

「ぐ……ぐ、あ……あ……」

痛みとクリに与えられる刺激と、ぐちゅっ♡と響く淫らな音……。

「痛い……よお……つ、は、あ、あつ、クリ……やだ、やだ……つ」

「はあ……ヌルヌル気持ちいいね」

お兄ちゃんは楽しそうに腰を動かし始める。

（中略）

でもその瞬間。

バンッと激しい音とともにドアが開く音が響いた。

「あ、あ、あ、んんんっ」

よがる私と腰を動かし続けるお兄ちゃん。

「……何してんだ」

ドアの方向から響く、低く太い声…。

「お父…さんっ…お父さん、助けて…っ、あ、あ…」

「…来たか」

助けを求める私と残念そうに舌打ちをするお兄ちゃん。

やっとお父さんが来てくれた。

助かった…

本気でそう思った。

「鍵。」

お父さんはお兄ちゃんに低くそう呟く。

「…はあ…。せっかく楽しんだのに。」

お兄ちゃんは私の中におちんちんを突っ込んだまま、小さな鍵をお父さんに手渡す。
パイプは動いたままで、私はもう限界ギリギリだった。

「あ、あっ、それ、止めて…クリやだ…あっ」

身体をのけぞり、あと少しの辛抱だと必死で快感を逃がす。

「菜摘ちゃん、力抜いて。手錠外してあげるから。」
お父さんの優しい声に縋りたくなる。

「んっ、あ、お父…さん、助けて…え」

カチャカチャと鍵を外してくれる音…。

フツと腕が解放されて力が抜ける。

「痕が残ってる…。可哀想に。」

お父さんは慈しむような穏やかな表情でそう言うと、私の頭を撫で、流れる涙を指で拭う。

「はや、く…づ、クリ、だめ、吸っちゃだめえっ」

限界ギリギリで、お父さんの優しさに縋るように、目を見て訴えかける。

お父さんの表情は変わらない。穏やかでいつも通り…。

それが異様だった。

だってどう見たって今は緊急事態なのに、それをなんとも思っていないかのような態度…。

「はあ…。こんなに乱暴にされて…怖かっただろ？」

俺ならもっとゆっくり沈めてあげられるのに。」

（狂愛3Pダブル調教の全容は製品版にて）